

修士課程 2年 周 可殊

修論題目：「博物館資料情報相互利用のための共通メタデータ —人文・自然系博物館のの違いと標準化への影響について—」

修論要旨：

90年代以来、コンピュータの普及とインターネットの高速化に伴い、世界がデータ化の新時代を迎えている。博物館間でも、情報自身のデータベース化と情報間の交換・共有・活用、さらに国際交流が円滑に進むことを目標に、博物館メタデータ記述法の共通性や必要性が論じられるようになった。しかし同時に、標準化への取り組みは、垂直比較で欧米より、水平比較で図書館界と文書館界より、日本の博物館界ではかなり遅れており、更に標準化の必要性と向き合い、人文系と自然系博物館とでは、対策が大きく異なる。

したがって本研究は、主に人文系・自然系の博物館の歴史的経緯に注目し、標準化に対して両者の進め方の違いを整理し、照合し、その理由を明らかにする。また、マッピングを通じて、現在日本国内で提案されてきた一部のメタデータ標準が、どの程度世界標準と対応しているかを確認し、評価する。

第1章では、研究背景や先行研究と課題、研究目的、研究手法と対象、および用語の定義について述べた。

第2章では、90年代を分岐点として、これ以前の海外先進国で提案された「標準」の種類について記述しながら、同時代の日本に視線を移し、予備調査として、帝国博物館時代からの日本における資料情報管理の経緯を説明し、標準化の行為が始まる直前における日本の博物館の電子化の現状を考察し、標準化で海外が日本に先行する理由を明らかにした。

第3章では、第2章で言及された調査研究を切り口として、大まかな年代時期を軸に、その後、日本の人文系博物館と自然系博物館がメタデータの標準化を推進するために行ってきた取り組みを整理し、考察した。

第4章では、第3章の結論を基づいて、適切な日本国内の人文系博物館のメタデータ基準をいくつか選択し、マッピングを通じて国際標準規格（IGMOI とダブリンコア）とどの程度の整合性を持っているものなのか、比較分析を行った。

第5章では、第2章から第4章までの結論を踏まえ、人文系と自然系博物館のメタデータ標準化の違いの理由を分析し、日本の博物館におけるメタデータ標準化の今後の推進方向について、いくつかの提案を行った。最後に本研究で至らなかったところを今後の課題として挙げた。